

松 山 大 学 論 集  
第 24 卷 第 2 号 抜 刷  
2 0 1 2 年 6 月 発 行

## 対面的コミュニケーションについての考察（Ⅱ）

—— 竹内レッスン：体験と省察に基づいて ——

国 崎 敬 一

# 対面的コミュニケーションについての考察（Ⅱ）

—— 竹内レッシン：体験と省察に基づいて ——

国 崎 敬 一

## 序 言

前論文では、竹内レッシンの体験と省察のうち、Aさんとのレッスンに関するものを前半まで、報告し考察を加えたのであるが、本稿では、その続きを報告し考察したい。

## Ⅲ Aさんとのレッスン、後半部

### （9）微笑み

このとき私は、足を踏み出すときから顔に微笑みをたたえて、Aさんに近づいて行ったのである（\*）。

#### （\*）[微笑みという対人戦略]

なぜこのようにく足を踏み出すときから顔に微笑みをたたえてく近づいて行ったのか。

a) まず、私は基本的に対面的状況が苦手である。人と正対して話すのが苦手であり、相手の目を見て話すのはさらに苦手である。互いに目を見合う（アイコンタクトをとる）のを避けたのである。

なぜか。それは、[互いに目を見ると、目に心の動きが現れるから、相手が今どう思っているか・どう考えているかが自分に分かり、また、相手も私がどう思っているか・どう考えているかが分かってしまう。そして、往々にして、私は相手に知られたくない思い・考えを持っており、相手も私が知りたくない思い・考えを持っているはずである。だから、私は相手の目を見たくないし、私の目を見られたくない] のである。例えば、私が相手をほめているが、内心では決して相手を評価していない、あるいは見下しているといった場合、[そういう私の内心を私の目つきで相手に知られたくない] と思って、

または「相手がそれを知るといやな思いをするだろう。それは相手に悪い」と思って、目を見ないようにする。別の例を挙げれば、私が友人を飲みに誘い、友人が「うん、行こう」と口では言っているが、100%行きたいようには見えない場合、私は、友人の「本当は行きたくない」という気持ちが目に現れるのを見たくないと思い、視線を合わさないようにする、といった具合である。後で述べるが、私は「人はなかなか友達になってくれない。なってくれても、本当はそれほど僕の友達でいたくないんだ。」という思いが強く、それゆえ、「一度なってくれた友達は、失いたくない」、[友達が去っていく場面は見たくない]という思いが強くあるのである。

要するに、このように私が苦手意識をもってしていると、私の表情や姿勢・身構えを通じて、それが相手に伝わり、相手も話しかけにくくなっていると私は思っていたのだ。

10年ほど前から、人と対するときには、相手が話しかけやすいように、最初から笑顔でいるようにしていたのである。

b) 生い立ちからくるものもある。

小さい頃から、近所や学校で他の子どもたちと遊ぶとき、友達の輪からなぜかはずされる・入れてもらえないという体験が多かった（具体的には、(11) [付論] (1), (2)で述べる）。それへの反動形成のようにして、家で本を読んだりして一人楽しむことが多かった。また、皆から好かれなから、それなら勉強で頑張って存在価値を認めさせるという方向でやってきた。結局、**自分には人が寄ってこない、自分は人に好かれなから**という思いがかなり強い。

そこで、誰でもこちらへ寄ってこようとしている人が寄ってきやすいように、「暖かい」(＝「愛情のある」)顔をしたらいいのではと思って、笑顔をするようになったのである。

c) 自分は「見た目」が、四角四面の堅物、いつもしかつめらしい顔をしている、例えば、赤ちゃんをあやそうとすると泣き出してしまうような「こわい顔」をしている、という思いがある(実際、大変まじめである)。これでは、人は寄ってこない。せめて、寄ってきやすいように笑顔でいようというわけである。

d) 自分も人も世界も、今のあるがままでいいと、心底思うことが弱く、このままではいけない、**ちゃんとしておかないと大変なことになる**という思いが強くある(何が大変なのか実はよく分かっていないのに大変だと思ってしまうのは、「体質」的なものというしかない)。大変な心配性である。**[もっとちゃんとしておかねばならない]**と、自分にも他人にも世界にも多くを高くを求めている。わがままで自己中心的なところが強いので、どうしても他人に多くを求める。そのような高い要求水準で人に接するから、いつも人の問題点ばかりが見えてくる。いつもそれにイライラし、人を内心責めている(ときには口に出して言ってしまう)。どうしてもそういう気配が、顔に出る。こういう人は嫌われる、人が寄ってこないと思う。そこで、人を遠ざけるような顔つき・雰囲気消すために、笑顔でいるようにしてきたのである。

なお、私は人が苦手で、人を遠ざけるような雰囲気でいる一方で、人と一緒になりた

い、つながりたい、具体的には友達がほしい、友達と時を忘れ我を忘れて一緒に遊べたらどんなに楽しいだろうという思いが強い。b) で書いたように、友達の輪からのけ者にされていたという思いがあるから、なおさらそうなのであろう。かくて、今の自分のままでは人が寄ってこない、でも人が寄ってきてほしい、そこで人が寄ってきやすいように笑顔をたたえる、というわけである。

かくて、出会いのレッスンでAさんのほうへ歩いていったとき、私は「全方位外交」的に、く誰にとっても、どんなときも、何でも暖かく受け止めてくれる人、そして何でも分かってくれる人〉と受け取られるようにするため笑顔をたたえていたのである。いろいろ思案の果てに思いついた対人戦略、そして、自己防衛としての笑顔だったのであり、自然に湧き出た笑顔ではなかったのである。とはいっても、このとき意識して笑顔をたたえたのではない。この頃いつもやっていた笑顔戦略がつい出てしまったのである。

(10)

私はAさんに近づいていった。Aさんもはじめは私に近づいてきていた。だが、途中でやや方向を変え、私とすれ違う方向へ歩いた。彼女の顔がややこわばった。〈近づきたくない人・近づきたい人〉が見えたという顔つきになった。

私は少しがっかりし、困ったなと思った。[(近づきたい) Aさんにも、近づいていけ、親しくできたらいいな] と思っていたからだ。また、立ち往生だけはしたくないと思っていたからだ。

しかし、レッスンの場に入った以上、相手と出会うという課題をなんとかやり遂げないといけないと思い、そうしようと思った(\*私には、何ごととも課題としてとらえてそれを達成せねばと前のめりになるところがあるのである)。具体的には、〈感じるままに動く、できれば近づいて親しくする〉ことをしようと思ったので、近づいていった。そして、相手と1m くらいのところまで来た。このときのAさんとの状態では、私にとって親しくするとは、く世間話をする〉くらいが、精一杯のことだったので、ここで私は、とっさに頭に浮かんだことで話しかけた。

「最近、ガン騒動があったんですよ。でも、何でもないことが分かって、ハッ

ピーです。」このレッスンの少し前、8月に人間ドックの検査で前立腺ガンの疑いが出て、心配性の私は鬱々<sup>うつうつ</sup>たる日々を送っていたのだが、結局精密検査で何でもないことが分かり、ドッと安心したということがあった。それが頭に浮かんだのである。すると、Aさんは、「私の夫も胃ガンになりまして、亡くなったんですよ。」と言ったのだ。私は、「ああ、そうですか。」とだけ言って（＊あまりに予想外の答えに、私は対応できなかったのだろう）、Aさんから離れて歩いていき、東側の壁に向かって座った。

そして、これで終わったのでは、Aさんに悪いかなと思い、また西の方を向いて座り直し、Aさんのほうをうかがった。Aさんが私から離れて西の方へ歩いていったのが見えた。立ってまた近づいて行こうかとも思ったが、Aさんが向こう向きに座ったので、私もこれで終了だなと思って、東壁を向いて座った。

私が「ああ、そうですか。」とだけ言って離れていったとき、見ている参加者たちから、大きな笑いが起こった。私には、それは少々ではあるが非難や軽蔑の笑いに聞こえた。一面において、同情の言葉を発することもなく離れていった私の情の薄さをやや非難しているような笑いに聞こえたのである。余りに予想外の答えにとっさに答えが出てこなかっただけに、それに対してそんな笑い方をしなくてもと思った。他面において、私が出会いのレッスンとはどういうものかよく分からずにレッスンに挑戦し、単なる雑談で済ましてしまったことが可笑しく<sup>おか</sup>くてでた軽い軽蔑の笑いにも聞こえた。それに対しても、私なりに竹内さんの言うとおり精一杯やっているのにそんなに笑わなくても、と思った。この笑いをうけて、私はいよいよなんとか出会いのレッスンという課題を果たさなければと強く思った（＊）。

（＊）<sup>ひが</sup> [僻みの精神]

これはあくまでもこのときの私にはそのように体験されたということであって、笑った人たちがそのようなつもりで笑ったとか、「実際」「客観的に」そういう笑いであったとかいうのではない、のは言うまでもない。からだの単なる反応のようにして出た単純に「可笑しかった」という笑いであったと思われる。というのは、竹内レッスンに何度

か出ていて分かったのであるが、竹内レッスンでは参加者の間に深い人間的信頼が生まれているので、人を非難するあるいは軽蔑するといった感情は出てこない（成立しない）ようなのだ。おそらくこのときは、レッスンに初めて参加した私は、まだまだそのような人間的信頼が実感できずにいたと思われるし、下で述べるような私の日常世間における「僻みの人格」を引きずっていたのだらう。そのために単純な笑いを、非難・軽蔑として体験したのであろう。

この単純な笑いを少々ではあるが非難や軽蔑として体験したという屈折した体験の仕方には、重要な問題が含まれていると思う。私の場合は軽微なものではあるが、一般にこのような屈折は、三浦雅士が『出生の秘密』（講談社）の中で、夏目漱石などを代表例に、詳細にかつ鋭く分析している「僻みの精神」、言い換えれば、〈僻みという人格構造〉がもたらすものであろう。また、この人格構造は、コフト心理学で言われる自己愛的人格の一つのタイプである。このような自己愛的人格は、漱石のような極端なケースはまれであろうが、大なり小なり多くの人に認められるのである（タイプや程度はさまざまであるが）。そして、このような人格構造が最近増えつつあるとも言われている（速水敏彦『他人を見下す若者たち』講談社現代新書や岡田尊司『人格障害の時代』平凡社新書などを参照）。

また、三浦が示唆しているように、この自己愛的人格の抱える問題は、(17でふれるような)社会的自我にとっての人生の最大のテーマ、この世の人々からの愛と承認という主題と密接に関連している。

そしてもう一つ重大なことは、このような私の（軽度ではあるが）「僻みの人格構造」が、後述するようなこの出会いのレッスンにおける出来事／体験によって、最終節(37でふれているように、いい方向へ少しずつ変容してきたということである。この問題は、重要なテーマとして探究を続けたいと思う。

## (11) 過去のことばかり

竹内さんが、「はい。そこまで。」そして、「目をつぶって体験したことを思い返してください。」と言った（\*この箇所の言葉は、竹内さんの記憶によって訂正しました）。

二人は竹内さんの前に坐り、体験を思い返した。しばらくして、竹内さんが「体験したことを一つ一つ、そのままの順番で、語って下さい」と言った（\*この箇所の言葉も、竹内さんの記憶によって訂正しました）。二人はそれぞれ話した。Aさんが話したことは、憶えていない。私は、だいたい次のようなことを話した。

「昨日この会場に来て、最初にAさんを拝見したとき、話しかけにくい感じだったが、懇親会のとき隣だったので、話してみたら、普通に話せたので、話せば話せる人だと思った。それで、レッスンでは、話せば話せる人だと思いつつ、近づいて行った。…（このあとは10)に書いたとおり）」

竹内さんは、こんなことを言われた。

「君は、過去のことがばかり言ってるね。」

私は、この言葉にハッとした。胸を突かれた（\*）。

（\*）[ラベル（＝過去）の貼り付け]

なぜ、ハッとしたのか。私なりの考えでは、次のようである。

a) 私は、日常生活で、人と遭ったとき（例えば、大学の研究棟の廊下で他の先生とすれちがいながら軽く会釈するときなど）、その人に強く結びついているエピソードやそれに由来する思い（例えば、その人との間に以前齟齬<sup>そご</sup>があって、意図せずその人を傷つけることを言ってしまう、悔いが残っている、など）が、つい頭に浮かんでくる。そして、それに囚われてしまって、今ここのその人と囚われなく接するということが難しいということがあった。

b) 私は、ラベリングをしがちである。人にラベルを貼り（＝その人を世間的カテゴリーに分類し）、その人の言動などをそのラベルで解釈し、説明しようとする。

例えば、「おばさん」。中年の女性を見ると、「おばさん」というラベルを貼る。このラベルには、「おばさん」とはどういうものか、どのような行動特性・性格特性をもっているかについての「理論」がくっついている（例えば、おばさんは詮索好き、おしゃべり好き、図々しい、など）。これは、「おばさん」の言動の解釈装置・説明装置として働くし、予測装置としても働く。このラベルと理論は、世間で流通しているものを取り入れたものと、それに影響されつつ私が作り上げてきたもののアマルガムであろう。

私が、近所の中年の女性にいったん「おばさん」というラベルを貼ったとしよう。犬の散歩をしているとき、その人がこちらをややじーっと見たとする。私は、おばさんは詮索好きだから、じーっとみているんだろう、と解釈する。おしゃべり好きだから、きっと私の今日の様子を人に話すにちがいない、と予測する、といった具合である。

私は、この世の人々について多くのラベル・理論を発達させている。そして、このラベル・理論は、過去のものである。過去の体験や知識から形成されてきたものである。私は、今ここの・目の前のその人そのものと対するのではなく、その人に過去の思いや過去のパターンを貼り付けて、それとつきあっていることが多いようである。一旦貼り付けてしまうと、それ以上その人自身を見ていこうとしない。これではいけないと、うす

うす思っていたのである。だから、竹内さんの言葉にハッとしたのだ。

### 【付論】対処の対象，非好意的な存在

ここまで書いてきて、なぜこのようになったのか、さらに深い理由が見えてきた。それは、結局、私にとってこの世の人々は、基本的に〈**対処の対象**〉だったのだろうということだ。出遭った相手をよく**観察し**、自分の**内心**（意図・思惟・感情など）と**外的行動** overt behaviour（行動・発言・表情など）の**照応パターン**を手がかりに、相手のそのパターン（こういう目付きをしたときには憎んでいる、など）を**読み取り**、次に同じ種類の相手と遭遇したときは、蓄積したそのパターンを**適用して**、適切に**対処する**という対し方をしなければならぬ人々だったのである。なぜか。それは、人々が私にとって基本的に非好意的な存在としてとらえられていたからであろう。ほっといても好意的ということは決してなく、通常は非好意的、無関心、悪くすれば敵意的、という存在として私にはとらえられていた。なぜそうなったのか。二つの事情が影響していると思われる。

(1) 一つは、幼少の頃（——昭和30年頃）、近所の子どもたちから仲間はずれにされた経験をもっていること。小学校に入る前頃、近所の子どもたちと、そのうちの一人の子の家の庭で、**缶蹴り**をして遊んだことがあった。缶蹴り遊びに入れてもらったのは、あのときが初めてだったと思う。入れてもらって嬉しかったのを憶えている。私は、一緒に遊んだ子どもたちの中では一番年下のほうだったと思う。

缶蹴りのルールを説明しておこう（若い人たちは知らないかもしれないので）。簡単に言くと、かくれんぼの変形だと思ってもらえるといい。〈①じゃんけんでオニを一人決める。オニ以外は逃げ手になる。②逃げ手の一人が缶をけり、オニがそれを取りに行ってる間に、皆隠れる。③オニは逃げ手をさがし、見つけたら、缶のところにつなぐ。④オニが全員を見つければ、1ゲーム終わりで、最初に見つけた者とオニを交代する。⑤全員が見つかる前、誰かがオニのいないスキに缶を蹴り飛ばせば、つながれた者は逃げ、オニは最初からまた皆をさがし直す〉というものだ。

昼過ぎ頃から始めて、私が2、3番目にオニになった。私は懸命に皆を見つけていったが、あと2、3人というところで、缶が蹴られてしまった。また探す。もう少しでまた蹴られる。またやり直す。また蹴られる。これが延々と続いた。時が過ぎて、空が夕焼けしてきた。まだ、オレがオニ。悔しいし、なんだか悲しくなってくる。結局、暗くなって缶蹴りを止めるまで、私がオニだった。

次の日もまた缶ケリをやった。今度はオニが続かないようにと頑張った。だが、同じだった。一旦私がオニになると、もう少しのところで蹴られる。これが延々と続くのだ（小学校高学年の者もいたから、小学前の子の守る缶など蹴ろうと思えばいつでも蹴れたのであろう）。夕焼けになり、暗くなってきた、延々とオニをやっている。ひどく悲しくなってきた。

た(※)。

もちろん小さな子がオニをやると、足が遅いからどうしても全員見つける前に缶を蹴られてしまう。だがこのときは、他の小さな子がオニをやると、だいたい1、2回缶を蹴られたところで、次は全員みつけることができ、オニを交代するのだ。たぶん他の子のときは、何度もオニをやらせると可哀想だから、缶を蹴らないようにしているのだろう。なぜオレだけ蹴られ続けるのだろう。オレはいじめられているんだ。オレを仲間に入れたくないんだ。

このように**のけ者**にされて、私は何か自分が悪いことでもしたのだろうかと考えた。しかし、何も思い当たることがなかった。私がなにか悪いことをしたからではなく、私そのものを排除したかったのだ。でもそれはなぜ? どう考えても、理由が分からなかった。私は、理由なく不当に排除された。気を失うように悲しかった。大げさに言えば、なんだかこの世の底から自分だけ落ちていくようだった(子どもにとって、近所の子どもたちが全世界＝全世間であるようなところがある)。

(※) 私にとって夕日には「悲しい」というイメージがつきまとっていたような気がする。それにはこの幼児の体験が反映しているのかもしれない。また、一日目に子どものようになって「真っ赤な夕日」と歌いおどったとき、突然悲しくなったのにも、「真っ赤な夕日」の情景が引き金として働いたのかもしれない。

大きくなってから一つ分かったことがある。たぶんこれが大きな原因だろうと思われることだ(これは、私よりなんでも聡かった姉に、示唆されたことである)。

私の家は、九州の福岡県南部にある都市の郊外にあった。その都市の海沿いの地域は、明治以降近代産業で大いに発展していたところである。私の生まれた町はその都市の郊外で、山の方にあった。しかし、そこは、明治維新までは小さな藩の城下で、こちらの方がずっと町だったそう(海沿いの方は小さな漁村だった)。近くの小学校に城跡があり、その近くの家々には、元お武家さんの家も多かったようだ。近所は、終戦直後の都市部の産業発展が及ばない、貧しい地域だった。私の家はもともとは酒の蔵元で、戦後は食料品から生活雑貨、教科書・雑誌まで売る「よろず屋」をしていた。戦争直後、物資の乏しい時代に物資の流通になっていた小売店は、大変儲かったようで、私の家は、周りと比べると、格段に豊かだったようだ。近所の子が「塩2円分くれんね」とつましく買いものに来る一方で、うちには、あの貧しい時代に女中さんがいて、電話があり、冷蔵庫があり、姉にオルガンを買ってやり、毎年家族で温泉旅行に行っていた。近所の人たちから見れば、目立って豊かである。しかも、たまたま物資を握る小売りをしていただけで豊かになっている。私が一緒に缶蹴りをした子たちの家は、城に近く、元武家の家が多かったように思う。もとはこちらが上だったのに、今は貧しく、あちらが豊か。自然にうらやみ、ねたみ、屈折が生まれているのではないだろうか。とにかく、親たちにとって、うちの家は気に入らない、あまりつきあいたくない家であり、子どもにもそれが伝わっていたのであろう。私は、そのような家の子とい

うだけで、〈排除されいじめられて当然の子〉と思われていたのではないだろうか。

今から考えると、もう一つ小さな原因が思いつく。その近所の子どもたちのグループは、私にとって前からやや入りにくいグループだったようだ。その子たちは、私を仲間に積極的にかつ好意的に入れるという風には見えなかった。そして、私には「少し悪い子たち」に見えていた。私が100%積極的に友達になりたいという子たちではなかったのだ。でも私は、とにかく同年齢の子たちと一緒に遊びたかったのだ。それで、勇気を出して、やや無理をして、その子たちの中に入れてもらったのだ。私のこのような積極的に友達になりたいのではない、もう一つ居心地が悪いという雰囲気が、その子たちに伝わって、積極的に仲間に入れなかったという事情も、仲間に入れない原因としてあったかもしれない。しかしこれは、私が受けたやや陰湿で意図的な排除・いじめの原因としては、先の少々憎悪の混じったねたみに比べれば、小さな原因にしかならなかったと思うが。

子どもにとって、近所の子どもたちは、家族と並んで、極めて重要な存在である。子どもにとってこの世の人々とは、近所の子どもたちなのだ。結局のところ、私が最初に出会ったこの世の人々が、私に対して排除的で非好意的な（一部やや敵意的な）存在だったということになるだろう。

(2) 私にはこの世の人々が基本的に**非好意的な存在**としてとらえられていたもう一つの理由は、私が小学校2年以来、高校卒業までずっと転校生であったことだろう。新しい土地に引越すと、学校でも近所でもつねに**よそ者**として入っていかなければならなかった。

父の職業の関係で、小学校2年の時から、南は鹿児島県から北は青森県まで転校・転住を繰り返した。小学校で5回、中学校で1回、高校で1回転校した。ほとんどは小さな都市の郊外、ときに農村部。どこへ行っても、学校の子ども社会も近所の子ども社会も、よそ者の私に決して暖かくはなかった。よそ者の新参者を積極的に好意的に仲間に入れてあげようというようなところは、どこもなかった（高校のとき一度だけ、転入生として紹介された日に、友達になろうと言ってくれた子が一人いたが）。

**基本的に排除的**であったし、よそ者の新参者であるが故に暴力的ないじめを受けたこともある。それは、小学校3年時、山口県の岩国の小学校に転校したときのことで。住みはじめて1ヶ月くらいの頃、地域の子たちは最初から私に冷たかったが、めずらしくやさしくしてくれる年上の子がいた。その子について遊んでいたら、向こうに石を投げるように言われた。向こうに子どもがいるようだし、大体人に石を投げるのはしてはいけないことだと思ったので、投げたくなかった。でも、唯一友達にしてくれそうだし、庇護者になってくれそうだったので、投げないわけにはいかないと思って、投げた。そのときはそれで終わったのでほっとしていた。ところが、翌日教室にいたら、突然知らない子が2、3人入ってきて、「おまえっ、……やろがつ」とか怒鳴りつつ、私をボコボコに殴りつけた。これは、昨日石を投げたことへの復讐だ、子どもグループの「抗争」に巻き込まれたのだとすぐ分かった。私は、あまりの暴力的虐待にショックを受け（人から殴られたのは初めてだったし、私はまだ幼

く、転校したばかりで右も左も分からないという不安な状態だったことを考えると、どれほどショックだったか分かるだろう)、そしてこれからこれが続くのだろうか大変なことになったと、ゾッとするような圧倒的な不安と恐怖が、襲ってきた。世界の底が抜け、私一人落ちていくようだった。幸運なことに、そのあと、何もなかった。私はそれから近所の子とは付き合わなかったが、クラスには何とか入り込んだ。そして、転校がこの問題を最終的に解決した。

要するに、子どもの私にとって、この世の人々は基本的に非好意的な存在としてとらえられていたのであろう。

また、どの学校でも近所でも、当たり前だが、すでに友達の輪があった。私は、よそ者の新参者として、まず、その輪を外から見ることになる。その輪は、よそ者を積極的・好意的に仲間に入れようとすることは、基本的になかった。こちらからなんとか中に入れてもらえないのだった。しかし、私はそれが苦手だった。友達と一緒に遊んだことがあまりない私は、友達と楽しくやっていくそのやり方や感覚が分からなかった。かくて、子どもの私にとって、この世の人々は基本的に付き合うのが難しい存在としてとらえられていたのであろう。

以上二つの事情からであろうか、私にとって家族外のこの世の人々は、何をしなくても自然に私を受け入れてくれ、親しく寄ってきてくれる存在では決してなかった。そして、基本的に**あちら側に身内でかたまっている**、私に疎遠な存在たちであった。向こうにとって私は**異人**であったのだろうが、私にとってもこの世の人々は**異人**だったのだ。したがって、私は彼らをよく観察し、行動・発言・表情と心の動きの照応パターン、いうなれば、「習性」を読み取り、次にその人やその人と同じ種類の人に会ったときには、それを適用して適切に対処しなければならなかった(最悪の場合下手をすると、手ひどくこの世からはじき飛ばされ、抹消されかねない)、そして、その輪の中になんとか努力・工夫・戦略によって入れてもらわなければならなかったのである。

## (12)

また竹内さんは、「君は最初から笑みを浮かべていたね。笑みというのは、人に遭<sup>あ</sup>って自然に思わずでるものであって、遠くから近づくとき最初から微笑んでいるというのは、おかしいよ。」と言われた。この言葉にもハッと胸を突かれた。先に説明したように、私は最近人に対するとき、人から「こわい」と思われないように、近寄りがたいと思われないように、意識して微笑みをたたえてから近づいていくようにしていた。そして、このときも無意識にそういう対人戦略としての笑顔をたたえていた。そのことをズバリと指摘されたのであ

る（＊）。

私は、素のままでいよう、素のままで人に対そう、と思った。

（＊）[印象操作]

今（＝執筆時）考えてみると、変なことをやっていたものだ。それにこういう態度は、随分**策略的**である。また、そういうことになぜ気づかなかったのか。なぜ、素のままでつきあおうとしなかったのか。おそらく、素のままでは人はつきあってくれないし、こちらもつきあえない。**飾り**もいるし**鎧**もいる、と思っていたのだ。私のこのような「笑みを浮かべる」という態度は、ゴフマン（社会学）のいう「自己呈示（self-presentation）」における「印象操作（impression management）」にあたるだろう。日常の相互行為において人は、意識するしないにかかわらず、〈自分がどんな人間であるか〉を相手に示そうとする（例えば、[僕は意外と物わかりのいい人間なんだ] など）。これを「自己呈示」という。また、自己呈示において、〈自分に対して相手が持つ印象＝相手に見えているところの自己＝相手にどのように見えているか〉を操作しようとすることがある（例えば、自分が明るい性格の人と見えるように、快活なしゃべり方をし、笑顔を絶やさないようにするなど）。これを「印象操作」という。素のままでいようと思ったというのは、一つにはこういう印象操作はやめようと思ったということだろう。

## Ⅳ Bさんとの出会いのレッスン—Embrace

(13)

竹内さんはここで、一人の女性に向かって、「あなた、国崎さんと出会いのレッスンをやってください」と言われた（以下、彼女をBさんと呼ぼう）。彼女はうなずき、立って近づいて来た（＊）。

（＊）私にとってこの女性は、このレッスンにおいて特別な女性だった。この方は、二日目、つまりこの出会いのレッスンの日の朝から参加された。朝、彼女が玄関に入ってきたところに出遭わせ、その姿を見るなり、私は好意を抱いていた。顔もスタイルも雰囲気も、私がすぐ好意をもってしまう、憧れてしまうタイプだったのだ。また私は、映画の寅さんのように、好みのタイプの素敵女性に会うと、すぐ好意を持ってしまうところがあった。年齢は、私が見た感じでは、とても若い女性だった。

午前中、たまたま近くに、横に並んで座っていたことがあって、休憩のとき、私は話しかけてみた。[このような風采の上がらない中年のおじさんと話してくれるだろうか]

という思いがあったが、とにかく話しかけたいという気持ちの方が強いから、話しかけたのだ。確か「どちらから来られたんですか」というようなことを言ったと思う。すると、決して話しかけられるのは困るというふうではなく、むしろ、快く応じてくれた。嬉しくなった私は、頻りにいろんなことを話した。彼女は結構共感的に受け答えしてくれた。また、彼女の方が自分が今関心を持っていることについてやや熱意を持って話してくれたこともあった。それは大きく言えば、人と人の命のつながりに関することで、私も最近大変関心のあることがらでもあったので、熱心に話を聞き、こちらもそれについていろいろ話し、二人の話は盛り上がった。ふと私は、しきりにかつ熱心に彼女に話しかけ、それが止まらなくなっている自分に気づいた。あまりの熱意に彼女が引いてしまうのではないかと思い、周りの人たちの目も気になりだしたので、話すのをそれとなくやめた。

要するに、このあと起きたこととの関係でまとめておくと、

- 1) 私は彼女に対して好きで憧れるという感情を持っていた。
- 2) 彼女は若くて素敵で女性、私は中年の風采の上がないおじさん、だから、彼女は私にとって普通「相手にしてもらえない」まさに「高嶺の花」、という思いが私にあった、のである。

(14)

さて、Bさんとのレッスンが始まった。まず、離れて向かい合って立った。Bさんのような、私が好きで憧れており「高嶺の花」の女性の場合、私ははなはだ（真正面から向かい合う）対面状況が苦手なのだ（誰に対しても正対対面状況は苦手なのであるが、こういう女性の場合特に苦手なのである。「美人にみつまがえる<sup>がまがえる</sup>られた蝦蟇が冷や汗タラーリ」といったイメージまで浮かんでくる）。彼女を見た。〈私の好きな彼女〉が見えた。しかし、次の瞬間には、共感的に話してくれたときの〈僕の好きな彼女〉ではなく、**見慣れぬ奇妙な表情**になった。こちらに近寄りにくいといひ引いていくような、困惑しているような顔。すんなり近寄っていける顔ではなくなった。

一方で、彼女に近づきたいという気持ちは十二分にあった。また、出会いのレッスンの土俵にあがって一度「課題に失敗して」失笑を買い、今度こそなんとかみんなの前で「課題を達成しなければ」と強く念っていた。

「ともあれ、感ずるままに動こう」と意を決して、近寄りたいという気持ち

のままにかなりスタスタと近づいていった。彼女も奇妙な表情が消えて、すーっと近づいてきた。

(15)

手を伸ばせば触れるくらいの近さまで近づいた。彼女は、バレリーナのように、背筋を伸ばし大地を踏みしめスックと立っていた。私はふっと両手で彼女の両手をとった。彼女もそれに応えて僕の手を握った。…しばしあって…、私は、彼女とこれ以上対峙している（＝正対して目を見合っている）ことは到底できないと思った。何しろ、彼女は高嶺の花、僕は低き者なのだから。

私は彼女と一緒に床に坐ろうと思い、彼女の手を引きながら腰を落とし、しゃがんでいった（立って正対することに耐えられないので、そこから逃げようとしたのだ。〈腰を下ろして、まあ世間話でもしましょう〉という雑談のポジション＝私にとって楽なポジションにもちこもうとしたのだ）。だが、途中で腰を下ろしたとき、彼女は、私を見つめて、私を立ち上がらせようと手を引き上げた。「大丈夫。逃げないで。立って。向き合いましょう。きっと〈出会い〉ができるわ。」と言っているかのような感じだった。ちょうど、しっかり者の姉が恐がりの弟に言うような感じで。また、彼女は私を救おうとしているようにも感じた。そのとき彼女の足が見えたが、堂々と大地を踏みしめているようでもあったが、かすかに震えているようでもあった。彼女にとっても本当はこわい、勇気があることに立ち向かおうと精一杯踏ん張っているようにも見えたのである。

(16) Embrace

私は彼女の私への<sup>そくいん</sup>惻隱の情的な思いやりを感じた。と同時に、彼女も同じ出会いという「難題」に立ち向かおうとしている「同士」なんだという連帯感（つながり）も感じ、[逃げてはいけない、立とう。] と思って、立ち上がった。立ち上がって（手はつないだまま）彼女を見た。前より近い顔の彼女がいた。

正対して、さてどうしようか、と考えるまもなく、彼女が手をのばし、僕の肩に手をまわし、ゆっくりとそっと僕を抱きしめた。

私は、アッと驚いた。青天の霹靂<sup>へきれき</sup>だった。有りえないことが起きた。ふだん「こんなことがあったらどんなに幸せだろう、でも決して起こりえない」と思っていたようなことが、今まさに起きた。私は「しょぼくれたおじさん」、向こうは「高嶺の花のような美しく素敵な若い女性」、話してくれるだけでも有り難いのに、この私を抱きしめてくれるなんてと極度に感激した。極端な例を出すなら、『美女と野獣』の物語で最後に野獣が美女にキスされたときのような出来事、「奇跡の愛の一撃 (coup d'amour)」のようだった (\*)。

(\*) このとき私は、竹内さんが出会いのレッスンについて書かれたものをきちんと読んでいなかった。あとで読んでみると、そこには出会いのレッスンにおいて、参加者同士が、女性と男性とでも、互いに慈しむように肩を抱き合うということも起きると書いてあった。私はそういうことを全く知らなかったので、なおさら、彼女が抱きしめてくれたことにはなはだ驚き、感激したのだろう。なお、coup d'amour は私の造語である。

感激した私は、自然に彼女の肩に手をまわしそっと抱いた。私の膝のあたりが震えていた。そのまま抱き合っていた。

#### (17) 片恋, Bliss

彼女が私を抱いてくれ、私が抱き返し、彼女と抱き合っていたとき、私は恋に落ちてしまった。彼女への恋慕<sup>れんぼ</sup>の情に火がつき、募っていった。しかも、私は彼女の惻隱<sup>かんちが</sup>の情的な思いやりを異性愛と勘違いしてしまった。つまり、彼女のほうから抱きしめてくれたことを自分を好いてくれている証拠と受け取ってしまったから、勝手に相思相愛的な恋愛気分にはまってしまった。このあとずーっと、家に帰り着くまで、彼女を想ってボーッとしていた（だから、このあとボーッとしながら真剣にレッスンに取り組んでいたのである）。

会場から自宅に帰り着くまでのあいだ数時間ずーっと、彼女の身体に触れた部分、特に（一心に彼女を感じようとして）彼女の手を握っていた手のひらが、炎症を起こしたように、少し痛いくらいジンジンジンジンしているのだ。それは彼女を想うとひどくなった。人と接触した部分がその人と離れてからもずーっと接触感が続くというのは初めてであり、驚きであった（\*）。

（\*）これは、彼女に抱きしめられたことに、からだ＝いのちがひどく感激したからだと考えられるが、もう一つは、私のからだの感受性のほうも、〈ゆらし〉によって敏感になっていたからではないかと考えられる。〈ゆらし〉は、からだの感受性を敏感にするようだ。例えば、私が経験したものでは、〈ゆらし〉のあと食べたご飯があまりに旨味があるので、コシヒカリですかと訊いてしまったことがあった。他の人たちも同感だった。たばこが旨くなったり、酒が旨くなる人もいる。1cm<sup>2</sup>あたりの味蕾の数<sup>みらい</sup>は乳児のときに最も多いというから、乳児のときに味覚は豊かなのだらう——視覚も聴覚も、生まれたての赤子のほうが感受性が豊かであるということが、最近の研究で明らかになっている。大人になる過程というのは、赤子のときの豊かな感受性を生活の便宜に合わせて削減し再編していく過程のようだ——。となると、〈ゆらし〉で味覚が敏感になったのは、乳児の感受性が再生してきたということではないだろうか。

翌日から、手のジンジンはなくなったが、彼女を想ってひどく切なくなった。切なくて切なくてたまらなかった。驚いたことに、実際に胸が痛いのである。胸が痛く切なく、つらかった。これが続いたらどうなるんだろうと思い、彼女のところへ飛んで行って、この胸の痛みを何とかしてくださいと訴えたいと思った（「翼があったら、飛んでゆきたい」という歌詞は比喻でなく本当にそう思っているんだということが、はじめて分かった）。だが、この切なさは甘美でもあった。この歳になって、こんな切ない恋に落ちることができるなんて、幸運に感謝していた。ところが、この恋慕の情は2週間ほどでストンと消えてしまったのである。楽になってホッとしたが、あまりにあっけなく終わったのには悲しくなった（彼女の思いやりを勝手に私を好いてくれていると勘違いして、独り相撲の恋に落ちていただけだから、終わるのは時間の問題だったのだ。それにしても、早かった）。

### [付論] Bliss 無上の喜び—Embrace について

片恋はあっけなく終わってしまったが、すべてが終わってしまったわけではなかった。そのあと日がたつにつれ、もう一つ別の喜びが残っていることに、だんだんと気づいていった。じーんと私の存在の底で続いている喜び、私に生きているのもいいもんだと思わせてくれるほんわかとした喜び。

彼女が私を彼女のほうからそっと抱きしめて（embrace して）くれたとき、私はほんとうにほんとうに嬉しかったのだ。ひそかにワー、やったーと叫びたくなるような歓喜、至福感。もちろんこの至福感の半分は、勝手に落ちた「相思相愛」の幸福感だったであろう。しかし、それが終わったあと、何度か彼女のことを思い出したとき、存在の芯でジーンとするような幸福感が残っていることに気づいたのだ。抱きしめられたとき、この幸福感につながる無上の喜びがあったのだ。この無上の喜びは、一体何なのだろうか。また、なぜどのようにして生まれたのであろうか。私なりに考えた現段階での答えを書いておこう。

#### 1) [抱きしめられた記憶]

実は、私は人に抱きしめられた記憶があまりないのだ。その寂しさがこころに残っている。

まず、母に抱きしめられた記憶があまり浮かんでこない。物心つく前には抱きしめられていたと思うが、物心ついてからは、ほとんどないのである。母はいい人で優しく美しく気品のある人だった。私を相当に可愛く思っていたようだし、実際可愛がってくれたし、本当に大事にしてくれた。つまり、とても愛してくれた。だが、抱きしめたり、ほおずりしたり、撫でたりといった、ベタベタのスキンシップで可愛がられたという記憶がほとんどないのだ。そういう愛し方をしない母という印象である。（私がそう思い込んでいるだけかもしれないという疑いは残るが）——母は3、4歳ころに実の母を亡くし継母に育てられた。継母に本当に甘えることはできなかったと言っていたから、母自身ベタベタに可愛がられたということはなかったのではないだろうか。だから、そういうやり方になれていなかったのかも——。

そして、父親から抱きしめられた記憶はほとんど全くない。抱かれるどころか、スキンシップで可愛がられた記憶がない。父親が男の子を可愛くしてしようがないと、よくじゃれるように可愛がったり、スキンシップ的な遊びをしてやるものとよく言われているが、そういったことをしてもらった記憶がない。もちろん父は家族を支え守りぬき、まっすぐな生き方をした立派な父であり、ときどき面白い話をして皆を楽しませたりする気さくな父でもあったが、子どもにとっては基本的に厳しい父だった（もちろん父は父なりのやり方で子どもを大事にしていたんだ＝愛していたんだということは、今ではわかっている）。

娘が幼い頃、私があぐらをかいて新聞を読んでいたりと、よく後ろから抱きついてきた。あれは、ほんとうに嬉しかった（\*）。

（＊）人から抱かれる・抱きしめられるというのは、私にとって格別に嬉しいことであり、こころ、いや存在の奥底で求めているもののようだ。そういう私に彼女が現れ、私を抱きしめてくれたのだ。私が彼女に抱きしめられて格別に嬉しかった理由の一つはこれだろう。ただ、これはこの喜びを増幅させた事由であって、主たる事由ではないと思われる。本質的な事由は以下のようなものと思われる。

## 2）「抱きしめるという action（※）」

i）彼女が私を抱きしめたとき、それは、私がお願いしたから、求めたから、あるいは私が先に彼女を抱きしめたからそれに応えて、そうしたのではない。私がなにかしようとする前に、彼女のほうから率先して、そうしてくれたのであった。また、私と正対したときに、彼女が私に対してとりうる action は他にもあったなかで、私を抱きしめるという action を選んだのである（半ば無意識的にだったかもしれないが）。すなわち、彼女は彼女のまったく自由において私を抱きしめたのである。この点がまず重要である。

（※）action：社会学では action を「行為」と訳しているが、日本語の「行為」には action という英語がもっている leap in the dark 暗闇での跳躍という意味合いが薄い（leap in the dark：跳んだらどうなるか分からないという未来の不確実性のもとで、あえて不確実な未来へ向けて跳ぶといった意味。クリプキがワイトゲンシュタインの言語ゲームを論ずるときに使った言葉）。「行為」は action を事後に反省的にとらえるときにふさわしい言葉である（「君のあの行為は問題だ」といったふうに）。leap in the dark の性格が強いタイプの action にはふさわしくない（「これから作戦行動に移る」とはいうが、「これから作戦行為に移る」とは言いにくい）。ここでは、leap in the dark としての action を論じているので、action という言葉を使うことにした。また、ここで action という英語を使うことに関しては、竹内さんの「アクション」という言葉についての考え方も踏まえている（この原稿を読み直しているときに、竹内さんの『声が生まれる』（中公新書、2007）を読んでいると、p.89 に上と同じような趣旨のことが書いてあるのに気づいた。そちらも、参考にさせていただきたい。）。

ii）抱きしめるという action は、からだ＝いのちが他のからだ＝いのちを愛する最大限のかたち（の一つ）ではないだろうか。抱きしめるとき、他者を胸・腹という自分の最も内側で（＝private 私秘的で）攻撃に脆弱な部分へと入れ込むのであるから、相手をからだ＝私のうちに最大限に受け入れるという action である（＊腹側が実は内側であるということについては、25d [からだを開く] の注（＊）参照）。他としない、一緒になっていいとすることである。当然、相手への嫌悪がゼロであり、違和感がゼロであるとするのである。また、相手を内に入れて背中と両腕の中に包み込むのであるから、からだ＝相手を自分のからだ＝いのちで守るという action である。

このようにみえてくると、抱きしめるという action は、からだ=いのちが他のからだ=いのちを愛するということの最大限のかたち（の一つ）と言えるのではないか。だから人（=からだ=いのち）は、抱きしめられたとき、ほんとうに嬉しいのだ。

iii) 抱きしめられたとき人は、必ずしもその抱きしめの action を受け入れるとはかぎらない。いやがったり、はねのけたりする可能性もある（最悪の場合腹を刺したりする危険性もないわけではない）。そういう不確実性、危険性のもとであえて抱きしめるというのは、ほんとうに勇気のいることである。それは、まさに leap in the dark なのだ（人への action は常に leap in the dark なのだろう）。人は相手がそういうことはしないとあらん限りに信じて跳ぶのである。いや、正確に言えば、抱きしめるという action 自体が、相手を信ずるという action なのだ——〈信ずる〉ということは状態ではなく、performative なものであるということ——。相手を抱きしめるという leap in the dark 自体が、相手を信ずるという leap in the dark なのだ。

このように人を抱きしめるという action は、からだ=いのちが他のからだ=いのちにあずけるということである。

それゆえ、抱きしめられた側から言えば、あらん限りに信じられたという体験なのである。この点においても、抱きしめられると人は、ほんとうに嬉しいのだ。

B さんとのレッスンの体験とそれに関する省察の途中であるが、紙数も尽きたので、続きは次論文に譲ることとしたい。

#### 参 考 文 献

- 竹内敏晴, 1988, 『ことばが劈かれるとき』, 筑摩書房  
1990, 『「からだ」と「ことば」のレッスン』, 講談社